

【角膜びらん・角膜潰瘍】

コンタクトレンズを装着されていて、眼が痛くなって受診される患者さんの場合、ハードコンタクトレンズをお使いの方は軽症で、ソフトコンタクトレンズをお使いの方は重症であるケースが比較的多く見受けられます。これは眼にできた傷の発見時期がハードでは早いのに、ソフトでは遅れてしまうことに原因があります。

もともとハードレンズは異物感を伴いやすいレンズであるため、少しの傷が生じただけでも痛みを感じます。従って患者さんは自分の眼の異常に早く気づいて受診されるため、軽症で済むことが多いのです。

それに対しソフトレンズは眼の表面にフィットすると、傷の表面に絆創膏のように貼り付くため、痛みを感じずに経過します。しかし絆創膏といってもこの場合は傷を治すものではなく、傷を悪化させてしまう可能性がある絆創膏なのです。従って幸運にも傷が治ってしまえば良いのですが、悪化していき痛みを感じ始める頃には相当ひどい状態になっており、そこで受診されても、傷を治すために数日～数週間コンタクトレンズの装用を中止し、治療に専念するしか方法がない状態に陥ってしまうケースが多いのです。

では、ソフトコンタクトレンズの場合は痛みが出るまで眼にできた傷に気づくことは不可能なのでしょうか？実は危険を知らせるシグナルはあるのです。

よくコンタクトレンズを付けはずしする瞬間に『しみる』感じや『異物感』を感じることはありませんか？いったん装用を開始してしまうと異物感は消失してしまうため、多くの方は気にも留めないようですが、実はこれこそが眼の『傷を知らせる合図』なのです。この状態が1日のみで2日以上続かない場合には、傷が治ってしまっていると考えられますが、3日以上続く場合には傷がひどくなっていると考え、治療を受けてください。

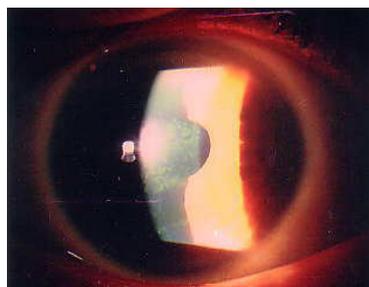


図1:点状表層角膜炎



図2:角膜びらん



図3:角膜潰瘍

眼の傷は、その深さにより名称が異なります。

最も軽い傷は『点状表層角膜炎』(上図1)といい細かい点状の傷が集まったものです。しかし眼の表面には多くの細菌が存在し、これが傷に感染すると傷は大きく地図状に広がります。これを『角膜びらん』(上図2)といい、この状態では痛みを強く伴います。ここまでであれば治療により傷跡も残さず完全治癒が期待できます。しかしさらに深くなり『角膜潰瘍』までになると治療しても傷跡を残してしまい、視力に障害を及ぼす場合もあります。